

# 被災地支援で発揮された 生協の底力

## ～被災地取材者座談会

参加者：フリーライター あきやまけんいちろう 秋山健一郎氏、はやさか えみ 早坂恵美氏、やまもとあきふみ 山本明文氏（50音順）

司会進行：日本生協連 専務理事 はがただし 芳賀唯史

日本生協連では3月中旬から4月上旬にかけて、出版部職員を含むライター7人を延べ49日間にわたり、被災地に派遣し、現地からの情報発信に努めた。今回、その中から3人の外部ライターに生協の被災地支援の内容を振り返っていただき、大規模な支援が実現した背景にあるもの、生協の持つ底力について語ってもらった。なお、司会進行は日本生協連専務理事の芳賀唯史が務めた。

## 阪神・淡路大震災をはるかに上回る 被害の大きさに衝撃を受ける

芳賀 本日は被災地取材に入った3人の方に、生協の被災地支援について感じたことを客観的な立場でお話しいただきたいと思っています



左から秋山健一郎氏、山本明文氏、早坂恵美氏、日本生協連専務理事の芳賀唯史

ます。では最初に自己紹介と取材に入った地域、第一印象をお話してください。

**山本** フリーランスライターの山本です。以前、日本生協連のコープ出版（現・出版部）に勤務していました。今は主に小売・流通などの専門誌に記事を書いています。いわて生協さんに震災後1週間目ぐらいに入り、沿岸部の炊き出しや移動販売などの支援活動に同行しました。沿岸部に入ったときは、やはりショックを受けましたね。コープ出版時代、阪神・淡路大震災の取材で神戸に行き、そのときもショックでしたが、今回の震災はその規模をはるかに上回ります。復興はおそらく十年単位で捉えなければならないだろうと感じました。あるいは元通りではなく、まったく別の形に変わるかもしれないとも思いました。



やまもとあきふみ  
山本明文氏

**秋山** フリーランスのライターをしています。主に企業のPR誌やスポーツ関係などの雑誌に記事を書いています。福島には3月20日、空路で入りました。福島空港行きの飛行機の乗客は7～8人しかおらず、空港もガラガラでした。そこからバスを乗り継いでコープふくしまさんに向かったのですが、郡山に入ると給水車が出ていて、対策本部のある福島市に着くと真っ暗で人通りがない。だんだん緊迫感が増していき、いつもの取材と違う空気を感じるようになりました。



あきやまけんいちろう  
秋山健一郎氏

福島市も地震の被害はあったのですが建物が端から端まで崩れているという状況ではなく、最初の印象は、正直、テレビで見ていた場所ほどひどくはないなというものでした。しかし、外見上大きな被害はない建物も、2階の天井が落ちていたりする。つぶさに福島の状況を見ていくと、いろいろなところに小さくはない被害が出ていました。

コープふくしまの皆さんは、この状況の伝わりにくさに危惧を持っていたようです。私もそのあたりをうまく伝え、福島は大丈夫そうだ、という誤った印象を持たれることのないよう、何ができるかを考えていました。

翌日以降、市街地を歩いていたら高校生がボランティアに行ったという話をしていたり、町行く人が岩手や宮城に何を送ろうかと相談しているのがよく耳に入りました。当時は原発事故の規模や影響がまだはっきりしていなかったので、福島市のかたがたは「被災者」というよりも「支援者」という意識が強いように感じました。

**早坂** フリーライターの早坂です。宮城県に住んでいて、企業の広報誌や官公庁の仕事をしています。生協さんとは古いお付き合いで、震災前にもこーぷ福社会<sup>※1</sup>さんの10周年記念誌の編集のお手伝いをさせていただきました。取材場所は宮城県ですが、八乙女にあるみやぎ生協の本部に行ったときに2階の天井が落ちていて、非常にショックを受けました。仙台では、震災直後はライフラインがすべて止まりました。しかもガソリンがなく、外出もままならない。食料不足が起きるのではないかとという不安をみんなが持っていることにびっくりしました。携帯電話がつながるようになると、今このスーパーが開いているという情報をやりとりするのですが、ガソリンがないので遠くまで買い物に行けない。そうすると近くのスーパーに何時間も並ぶしかないなど、そういう切羽詰まった暮らしを送りました。それが現地にいた人間として強烈に印象に残っています。

## 踏み込んでいって「どうですか」と聞ける立場にいるのが生協

**芳賀** 3月11日以降、現地の生協は地域で暮らしている人のために大奮闘するわけですが、その取り組みで印象に残っていることについてお話してください。

**山本** 生協自身が被災者です。自身の事業の立て直しと被災者を助けるという2つの課題を同時に進めていくのは、生協にしかできないことだなと思いました。震災後、多くの企業を取材したのですが、やはり自社の事業が優先です。それはそれで正しいことだと思います。生協はその上で移動販売や炊き出しなど被災者の方に支援の手を差し伸べている。盛岡の組合員がおにぎりを作って沿岸地域に届けたりするなど、その献身的な姿は生協ならではの事だと思いました。

**秋山** 対策本部で午前と午後にかかれた会議を取材していると、震災による施設の被害状況に関する報告と同時に、「いま売上は幾らで、これが売れている」という営業上の報告もある。当たり前ですが、営業活動も、組合員や被災者の皆さんへの支援活動など震災対応も、同時に進めていかなければならないんですよね。災害時に事業を継続する上でのシビアさを感じました。

また震災直後の各店舗での対応というのは、この目では見ていないのですが、話に聞く限りでは無料で商品をお渡ししていた店もあ



はやさか えみ  
早坂恵美氏

※1 みやぎ生協メンバーからの「生協の福祉施設があったらいいのに」というたくさんの方の声と、みやぎ生協の福祉に対する理念が一緒になって1999年2月に設立された社会福祉法人。



日本生協連 専務理事  
は が た だ し  
芳賀唯史

るし、半額にして販売した店もあったようです。それは現場の判断に任せていたようで、かなり臨機応変な組織だと思いました。

もうひとつ、フットワークの軽さも感じました。川俣町、飯館村や南相馬市など被害の大きかった浜通りの自治体に直接出向いてはヒアリングして、「何か足りないものはないか」と状況把握を継続していました。電話でやりとりしているだけ、要望が届くのを待つだけ、ではないんです。ヒアリングに同行させていただきましたが、その様子からは自治体のかたがたからの信頼感を強く感じました。生協という組織は地域に踏み込んでいける立場、役割を持っているんだなと思いました。それは長年の活動に基づく信頼があるからこそできるものなのでしょうね。

あと、介護施設などに支援物資を運ぶ任務についた共同購入の配達車に同乗して配達の様子を見せていただいたのですが、担当者の方が、「10日もトラックに乗らずにデスクワークする機会は久しぶりで、なんだか調子が狂ってしまっ」と話していたのが印象的でした。皆さんは、組合員の方に商品を届け、言葉を交わすのが日常で、毎日に張り合いを持っていたのに、震災によってそれができなくなったことをストレスに感じているように見えました。その日は、変則的な形であれ商品を届けに行けるということへの喜びややりがい、言葉の端々に感じました。

**芳賀** 原発事故との関わり合いはどうでしたか。

**秋山** 今から思えば全体像が見えていなかった時期でした。ちょうど飯館村で放射線に関する高い数字が出始めた時期で、村では窓を開けたり洗濯物を外干ししている家はないという状態でしたが、福島市においては原発のせいでは何かできないというのは無かったと思います。ただ原発から30km圏内に入る南相馬市の一部などでは、人が住んでいるのにスーパーなどは開いていない。当時はガソリンも不足していたので簡単に遠出もできず、そこに住む人たちが買い物に困っているという状況はありました。余震や再度津波が来ることを恐れていったん内陸部などに避難した人びとが自宅に戻っている時期でもあり、30km圏内は人口が増えていたようです。そういう状況を見て、あいまいな地域となった30km圏内で困っている人をどうサポートしていくか、というのはよく話題になっていました。

## 本部の指示なしで、その都度 重大な判断を下していった現場力

早坂 私は3月28日からみやぎ生協の対策本部に入り、まずお店を取材しました。秋山さんが言っていたように、震災直後は皆さんそれぞれ現場の判断で組合員さんへの対応を決めたと言っていました。桜ヶ丘店は女性の副店長さんだったのですが、避難誘導した後すぐに、必要なものを店頭販売しようと考えたそうです。しかし本部とは連絡がつかません。それで100円、150円とキリの良い値段を決めて、当日は雪が降ってきてとても寒かったのですがパートさんも帰らずに店頭に立った。携帯電話の明かりで店内を照らして商品を持ってきたり、車のライトで店頭を照らしながら売っていた。レジが使えなかったため電卓で計算していたのですが、夜になってソーラー電池が使えなくなった。そこでようやく販売をやめた。そういうことがあちらこちらのお店であつたらしいんですね。

翌日からの店頭販売でも被災した組合員さんが早朝から並ぶ。これは聞いた話ですが、ある店の店長さんが津波の被災地から来られた方を優先的に案内し「何でも必要なものを持って行ってください」と言ったそうです。本部の指示がないところで、その都度現場がいかに重大な判断を下していったかを、驚きながら聞きました。「みやぎ生協は自治体と災害時には店を開けるという約束をしている。そういう使命感がある」という言葉も印象的でした。

共同購入を見ても、人と人とのつながりで成り立っているのが生協の事業だということを実感させられます。共同購入のお見舞い活動では、支部への帰りが遅くなったり、予定軒数を回れずに帰ってくることが多い。なぜかという、行った先で家族が亡くなったという話が出る。そうするとどうしてもそこで親身に話し込んでしまい、本当は50軒訪問しなければならないのに30軒しか回れなかった。物を届けるということでは宅配便も被災地としては大変ありがたかったと思うのですが、宅配便だったら地域の人とそこまでの深いつながりはないと思うんですね。1週間に1回顔を合わせる関係だからこそ、被災者も自分の体験を共同購入の担当者に話すのだろうと思います。

津波で家の中が泥だらけになった組合員さんがいました。担当者が「大丈夫ですか？」と声を掛けて「これからどうするのですか」と聞いたら、「うーん、アパート取り壊すって大家さんが言うのから、引っ越ししかないと思って」と。本当は深刻な状況なのですが、穏やかに話をするんです。時には笑顔で。そういうのも信頼関

係の中で生まれるんだらうなと思いました。

他にも、「ふれあい便」<sup>※2</sup>の取材をさせていただいたんですね。先ほど言ったように仙台では食料を求めて多くの組合員さんが店頭で並ぶという状態がしばらく続きました。ガソリンがない、車もない、買い物にも行けなくなるとなると、高齢者やお体が不自由なかがたは本当に不安だったと思います。ふれあい便では震災の翌週からお見舞い活動をし、3月後半から会員さんのところに行って注文を聞いて、それを届けるという活動を再開しました。バナナ持って来たよ、ジャガイモ持って来たよと。そうすると「生協さんに命預けてっからさ」という話をされるわけです。セーフティネットのような形で社会的に弱い人を助ける仕組みができていたんだなと思いました。

**山本** いわて生協の移動販売では、がれきの中を走って辛うじて場所を探すのですが、地域の組合員さんが「ここがいいよ」「あそこの地区は家は残っているけど避難所から遠くて食料に困っているから、あそこに行くといいよ」と教えてくれるんです。そういう話を聞くと、生協は地域に根を張っている組織だなというのを実感します。早坂さんの話を聞いて私も思い出したのですが、宮古の店長が一刻も早く店を開けなければならないということで、本人は何日間か数時間の睡眠しかとっていないと言ってましたからおそらく気持ちも体もボロボロだったと思うんですね。その中で店を開けたというのはすごいと思いましたね。

**秋山** 福島医療生協取材しました。福島市の医療生協わたり病院では、一棟震災により傷んだ病棟があったため、1階ロビーを使って医療活動を行ない、震災直後は野戦病院のようだったと聞きました。また、浜通りから避難してきた人で必要のある方には放射線量測定器で計測できる態勢を整えていたそうです。いつも通っている患者さんと接触しない仕組みをつくらなければならず、そのチェック体制をどうするかにも苦労していたようです。

またガソリンがないので透析の患者さんたちが自由に通院できない。そのため患者さんには病院隣接の施設に泊まってもらうという対策をとっていました。もちろん医師や看護師さんも近くに泊まって待機することになります。さらに、お子さんがいる病院関係者のために保育所のようなものをつくって、そこで子どもたちの世話をします。ガソリンがないことによって、バックアップ体制、さらにそのバックアップ体制までが必要な状態になっていて驚きました。震

※2 ご高齢あるいはお体が不自由な方、ご家族の介護や産前産後・子育て中で買い物に行きたくても行けない方のために、食料品や日常必要な商品をお届けし、その生活を支援する買い物代行サービス。サービス実施店舗にて担当者が商品を購入し、ご自宅までお届けする。

災後すぐにそこまで出来たというのは、やはり志気が高いからだろうと思いました。

医療生協は炊き出しも何カ所かでやっています。品数も多く、きっちり作っている。作る過程も医療生協と避難所で暮らす被災者の方が一緒になってシステムチックにやっている。炊き出しを担当される方たちは「農民連<sup>※3</sup>や地域生協の力があって野菜を入手できるから炊き出しができています」と話していました。医療生協と地域生協でしっかり連携ができていたんだと感じました。

※3 農民運動全国連合会。「日本の農業と農民の経営を守り、日本農業の自主的発展を目指す」ことを目的とした全国組織。

## 「生協はひとつ」が明らかになった 緊急支援活動

**芳賀** 被災地の岩手・宮城・福島の生協の活動を支えるために全国の生協のトラックが駆け付け、日本生協連は物資をどんどん送り込みました。取材された皆さんから見て、全国の生協の緊急支援の様子はどうか映りましたか。

**早坂** 対策本部にお伺いすると、エフコープさんが居る、コープこうべさんが居る……。ユニフォームが違うんですね。いろいろな生協さんが居て、ある意味壮観でした。私自身みやぎ生協の組合員なのでお店を利用します。1週間ぐらいたってからお店に行ったら、普段買っている産直牛乳はなくて「大山牛乳」という見慣れない牛乳がある。後で担当の部長さんから日本生協連や全国の生協が協力してくれたと聞いて、生協の商品調達力というのはすごいんだなと思いました。お店のほかに個配も利用しているのですが、お見舞いにいただいたのもみやぎ生協の商品ではなく、他の生協さんの商品でした。そういうところに生協の強みが生かされていると思いました。

**芳賀** 大山牛乳は鳥取ですね。秋山さんはどうですか。

**秋山** 全国の生協から、かなりの人数の方がランダムに入ってこられたので、コープふくしまさんは最初どう迎え入れるかで苦労しているように見えました。支援の人たちに何をやってもらうのかは受け入れ体制づくりと同時に進行で決めていくような状況だったので、果たして本当に必要なところに何人回せるのか、支援に来てくれた人たちに誰が作業の指示を出すのか。最初は「明日から15人来てくれるけれどどうやって対応すればいい？」と心配する声が聞こえていました。

そこへ日本生協連の人たちが入ってまず状況を把握する。ガソリンはあるのか車は足りているのか、という中で支援の人をうまく回していく手順が、ちょうど私が福島に滞在していたころに決まっていたんですね。それは本当に見事だと思いました。

日本生協連の方とコープふくしまの方の間に議論が交わされているのもよく見ました。非常時、初めて会った人同士がいきなり一緒に仕事をするのだから衝突することもあったようです。でも、結果的には支援者のマンパワーをうまく機能させる仕組みがつくられていました。

一般論として、既存の組織に別の場所からの支援者が入って動きをとるのは難しいと思います。コープふくしまさんと日本生協連さんは、それを見事に実行していた。

また、コープふくしまさんでは「福島市だけ見ていると被害はそんなに大きくないけれど沿岸部はひどい。その中で私たちはこういう支援をしていきますというスタンスを、来た人にちゃんと知ってもらおう。それを地元に戻ってから伝えてもらうことで長期的支援につなげていこう」という話も出ていました。私が行ったころには新聞社に情報を提供したり、私に対してもこんな部分取材してもらえないか、というオーダーが届くようになっていました。そうした意識が生まれたのは、日本生協連さんなど、支援する人びととの関わりがひとつのきっかけだったと思います。

**山本** 全国の生協の勢いにはすごいものがありましたね。ガソリン不足が起きて内陸の盛岡ですら給油待ちの行列で毎朝1kmも渋滞していた。そんな中、自分のことは後回しで燃料やガソリンを運んでいました。「生協はどこへ行っても生協でしょ」というようなことをよく言われますが、今回はいい意味で「生協はひとつ」が明らかになったと思います。私が聞いた話では札幌から来た職員が共同購入の車に同乗して移動販売に行き、札幌で組合員さんと接していたのと同じように、いわて生協の組合員さんにも接することができてうれしかったという話を聞きました。そういう意味では生協はどこでも生協なんだなという気がしました。

**早坂** 他の生協の支援部隊をどう現場にマッチングするかということについては、私がみやぎ生協の対策本部に入ったときは日本生協連さんがまとめ役をやっていて、明日何人どの生協から来て、どこに支援に入ってもらおうのかという段取りをしていました。それがとてもうまく機能していたからだと思いますが、店舗でも共同購入で



も「本当に全国の生協の支援には頭が下がる」と感謝の言葉を口にしていました。「品出しはもちろんトイレ掃除もやってくれたし雪の降る中、行列の最後尾に立って案内もしてくれた。そうやってみやぎを支えてくれた。本当にありがとうの一言です」という話を皆さんから聞きました。

## 移動販売車やボランティアセンターなど 今後の生協の取り組みに期待

**芳賀** 今後、息長く被災地の復興支援をしていくことを、現地の生協も全国の生協も決意しています。生協の被災地復興支援に対してどんな期待をお持ちですか。

**早坂** 生協は地域経済のけん引役です。今回の震災で地域経済がダメになっています。沿岸部はもちろん、仙台などの都市部でも失業者が増えている。津波の被災地ではお店が流され、工場が稼働できなくなっている。原材料を持っているけれど作れない、売れないという状況もあるようです。先日いわて生協さんに行って復興フェアというのを取材させてもらったのですが、それは生協さんとお付き合いのない商工業者さんが盛岡の店舗で自社商品を売るというイベントでした。それを盛岡の人たちが買って支える。そんなふうには普段お付き合いのない業者さんにも、門戸を広げて応援する機会を設けてほしいなと思っています。

**秋山** 地元に着して信頼されているのは生協の強みだし、それは価値があるから信頼されているんだと思います。福島では飯舘村などが計画避難区域に指定されて、先が見えない中で、コープふくしまさんもいろいろな取り組みを進めています。あのフットワークの良さを見ると、社会の役に立っている場面というのは山ほどあって、復興の大きな力になっていると思うんですね。私のリサーチが足りないのかもしれないけれど、それはそこまで社会に伝わっていない気もしました。そうした活動を、もっと積極的に伝えて生協自身の評価を高めてほしいですね。やはり、村役場の人と腹を割って話せるようなあの関係性は、他の組織にはない貴重なものだと思いますから。

**山本** 移動販売を取材して思い付いたのですが、移動販売車を日本生協連が音頭をとってまとめて買えば安くなるでしょうから、それ

で販売するような仕組みをつくることはできないでしょうか。いわて生協では、沿岸部に仮設住宅が増えてくるので、そこで大型班や移動販売、仮設店舗に取り組むと言っていましたので、事業として成り立つのではないかと思いました。それとバスを造り替えた移動販売車を何件か取材したのですが、十分に採算が合うと感じました。昨日も大船渡で、あるスーパーさんが地元で移動販売をされていた方と契約し自社の商品を卸している事例を取材しました。数年後、被災地で不要になっても買い物難民の需要などがありますので、十分事業化できるのではないかと思います。

**芳賀** 移動販売車については仕様を決めて発注し、大量リースで利用することも考えています。

**山本** そうすれば地元の生協は楽ですね。また、生協ではボランティアセンターを開設していますね。東京に居てもインターネットを使って事務支援をするなど手伝えることはあると思います。生協のボランティアセンターをもっとPRすれば、現地に行かなくても手伝いたいという人は大勢いると思うので、そういう人たちのニーズに応えることができるのではないのでしょうか。また、先ほども言ったように復興はおそらく十年二十年単位だと思うので、ボランティアの仕組みそのものを事業化していかなければならないのではないかと感じます。それは日本生協連への期待としてあります。他にも、義援金ファンドのような仕組みをつくり、一口いくらで個人から募る。半分は募金で半分は投資という小口ファンドが実際にあります。そんな金融のような仕組みも生協でやっていただければと思いました。

## 被災地の問題を常に自分と関係がある ことと思っていきたい

**芳賀** 最後に、全体のテーマを通じて言い残したことを一言、二言ずつお話してください。

**山本** 被災地を取材して驚くのは「親父が行方不明なんだ」「お袋が避難所で生活していて」と大変なことなのに当たり前のように話される。それでも普通に仕事しているんですね。昨日も大船渡に行って「ご家族どうなんですか」と聞いたら「父親が死にました」とか、レジの女性は「妹が行方不明で」と。それでも通常通りに仕事

をしていて、それが東北の人たちの人柄なのか、我慢強いのか、それはもう私も言葉に表せないほどで、話を聞いて胸が詰まりました。だけど東京に帰ってくると忙しさにかまけて正直忘れてしまう。でも現地の人たちは、それを引きずって仕事しているわけです。まして目の前に流された家などが残っていて、だいぶ片付いたとはいえ、沿岸部は震災直後とほとんど変わっていません。

被災地では今もその過酷な生活が続いているわけですから、全国の人たちは何かしなければならぬと思うし、常に自分と関係があることなんだと思っていないといけないと思う。私の仕事で言えば、現地に行って取材してレポートするのが役目であり、自分の仕事としてやっていきたいと思います。

**芳賀** 生協の被災地支援の取り組みは大変注目されていますが、生協だけが特別だったかという決してそうではないんですね。生協が果たした役割が他の企業と違うとすれば、皆さんもお気付きのように、地域の人びととのつながり合いの問題なんですよ。これだけは非常に違ったんです。現地の組合員が一番うれしかったことは、商品を持って来てくれたことではないんです。「元気ですか」と声を掛けてくれたことがうれしいんです。地域の人びととの関係の深さと量、これは他の企業はまねできない。これが、被災地の中で活動した他の企業との一番の違いだったと思うんです。

**秋山** 物を届けるだけでなく言葉を掛ける。被災地域の人びとは、テレビでは震災のことしかやっていないし、人に会いにくいにもガソリンがないという中、買い物が唯一明るい時間で、生活の中のメインイベントになっているように見えました。店が開けば顔見知りの店員さんと話をするとか、そこは物を買うだけの場ではありません。被災地の人にとって店には「モノを得るという以上の役割」がある。移動販売だったらなおさらそうでしょう。それはやっぱり生協の皆さんが誇りに思うべきことだと思います。

**早坂** これは対外的にというよりも職員やパートさんに関してなんですけれども、震災では皆さん極限状況を味わっています。部下や仲間を亡くしたり、肉親を亡くしたりした方がいっぱいいるわけですね。中には津波の中に飛び込んで組合員さんを助けた職員もいる。今は皆さん緊張感を持ってやっています。本部も店舗も共同購入も職員の皆さんのテンションが高いんですよ。それで震災当日何をやったかを鮮明に覚えているんですね。でもその後の数週間、1カ月

間は無我夢中で何をやっていたかほとんど覚えてない。「何をしていたか」と聞くと、皆さん「あれ、何やっていたんだっただかな」と戸惑う。とにかく3月11日の2時46分を境にして極限状況を生き延びて、そういうのって精神的にどこかに残るんじゃないかなと思うんですね。心配し過ぎなのかもしれませんが、職員やパートさんに対するそういう方面のケアがもしかしたら必要になるのかなと思いました。

**芳賀** 一通り伺いました。私からお願いがあるのですが、この大震災の中でいろいろなドラマが生まれています。今後の取材では無数のドラマを掘り起こして記事にしてほしいと思います。津波に飛び込んで組合員を助け、山の中を一昼夜かけて支部に戻ったという職員が何を感じてそうしたのか。津波の被害に遭われてずぶ濡れになっていた方に行列の前に来ていただいて、好きなものを持っていいですよと言った店長の気持ち。これは本部の指示ではないのです。どうしてそういう判断ができたのか、その人が極限状態の中で何を考えてそういう行動をとったのか。それはもしかしたら組合員さんにもあるかもしれない。そういうドラマの一つひとつ掘り起こして教えてください。そして、それを伝えていくのが大きな財産になるのかもしれないと思います。本日はどうもありがとうございました。

